

## 【個人研究発表2】

### イギリスの音楽鑑賞教育におけるアクティブ・リスニング —活動を通じた音楽理解の観点—

小松原 祥子（神戸女子短期大学）

本発表の目的は、イギリス（イングランド）における初等学校段階の「聴取」に特化した音楽テキスト *Listening to Music Elements-Active listening materials to support a school music scheme-* (2007) シリーズを対象とし、音楽の要素を単元化してその特徴に沿った音楽を聴き、音楽づくり・歌唱・器楽・身体表現等の活動を通して音楽理解を育むアクティブ・リスニングの構造を示すことである。

アクティブ・リスニングについては、尾見他（2022）がコダーイ・アプローチの観点から就学前教育から教員養成への継続性を示している。

イギリスの音楽科ナショナル・カリキュラム（MNC）1999年改訂版の「学習プログラム Programme of study」は「①歌唱と演奏を通じた音のコントロール—演奏技能」「②音楽的アイディアの創造と発展—作曲技能」「③応答と批評 *Reponding and reviewing*—評価（apprasing）技能」「④聴取、及び知識と理解の応用」（QCA, 1999）の4つで構成されている。「④聴取、及び知識と理解の応用」は、KS1（5-7歳）・KS2（7-11歳）では「a. 集中して耳を傾け、音を内面化し、記憶していく」「b. 音程、音長、ダイナミクス、テンポ、音色、テクスチュア、サイレンスといった音楽的要素を、単純な構造（KS1：例えば始まり・中間・終わり、KS2：オスティナート）の中でどのように整理し、表情豊かに活用できるか」「c. 音がどのように多様な方法で作られ（KS1：例えば環境の中で発声する、手を叩く、楽器によって、KS2：ICTを含む様々な資源を通して）KS1：与えられた記号やシンボルを通して記述されるのか、KS2：関連する確立された記譜法や発明された記譜法を通して記述されるのか」「d. KS1：音楽が特定の目にどのように使われるか、KS2：時間と場所が、音楽の創作、演奏、聴き方にどのような影響を与えるか（例えば、機会や会場による影響など）」といったことを教えられるべきとされている（*ibid.*）。つまり99年版MNCでは、「聴取及び知識と理解の応用」の能力には音楽の要素を軸とした構造的側面を聴き取り、背景を理解することと表現とが統合されていると考えられる。

*Listening to Music Elements*の内容は「音長（Duration）、強弱（Dynamics）、テンポ、音色、テクスチュア、音程、構造」で構成されており、各単元で音楽ゲームによって子ども達に向けた「質問事項（*Questinos you might ask*）」への理解を育む形となっている。音楽ゲームは音楽づくりの活動が主体となっており、ペインター&アストン（1970）による鑑賞と音楽づくりが一体化したイギリスの創造的音楽学習の思想が見られる。ただし、ここでは身体表現・リズム遊び・歌唱・器楽・クロスカリキュラムの活動も含んでいる。

従って本稿では、これらの活動を経て聴取の力を育む構造に着目し、音楽の要素を軸とした表現を通して技能としての「聴取」の力を育む音楽鑑賞教育の設計への示唆を得る。